国立国語研究所学術情報リポジトリ

脚本の醍醐味

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2012

脚本の醍醐味

寺島　アキ子

舞台劇，ラジオドラマ，テレビドラマ，映画シナリオを書いてきたわたしは，科学とは最も遠い所で日本語（せりふ）を書いてきたと思う。

それぞれのドラマによって，せりふの違いがある。舞台劇では格調高いせりふもあり得るが，テレビドラマでは日常的なせりふが生き生きと表現されることが必要なように。そして，ラジオドラマは舞台劇に近く，映画シナリオはテレビドラマに近いと言えよう。

「若者たちの日本語が乱れている」と世の人は言う。だからこそ，現代劇に登場する若者たちにきちんとした日本語を使わせると嘘っぽくなってしまう。ことに，日常生活の場で見られるテレビドラマの場合，嘘っぽさは最大の敵だ。

方言というのは，いいものだと思う。ことに脚本家にとっては，方言を使うことで，その土地や，そこでの生活の雰囲気を出すことができる。あるいは，方言を使う登場人物の，出生地や，暮し振りを表現することもできる。

ただし，方言を正確に使うと，その土地以外に住む人たちには，理解できない恐れがある。

十年以上前のことだが，わたしは返還以前の沖縄を描いたドラマを書いた。沖縄の人に頼んで，せりふを方言に直してもらった。ところが，書いたわたしにさえさっぱりわからないドラマになってしまった。結局，相談して，沖縄の雰囲気が伝わる程度まで方言を減らしてもらった。それが正しかったかどうかはわからないが，沖縄以外の人にさっぱりわからないせりふに，二時間も付き合わせるわけにはいかないと，わたしは考えたのだった。

時代劇のせりふにも，同じような問題がある。

もっとも，テレビの時代劇には，わかり易さを通り越して，現代語そのもの，ひどい時には外来語までとび出したりして，白けてしまうこともあるが。

そんな時思い出すのは，山田太一氏がNHKから『壬申の乱』を大河ドラマにしてほしいと言われて，断ったという話だ。「その当時の人々が使っていた言葉をイメージできないから」という理由で。

そして山田氏は，その代りに幕末を素材にする『獅子の時代』を書かれた。これは，会津藩士と薩摩藩士を主人公にしたドラマで，いわゆるテレビ時代劇のサムライ言葉ではなく，会津，薩摩の方言を使う藩士たちを登場させたのだった。

せりふはドラマの命。そのドラマを書く脚本家たちは，さまざまな時代に，さまざまな場所に生きた人々を，せりふによって表現しようと苦闘している。

その苦闘がまた，脚本を書く者にとっての醍醐味だと言えるのかもしれない。